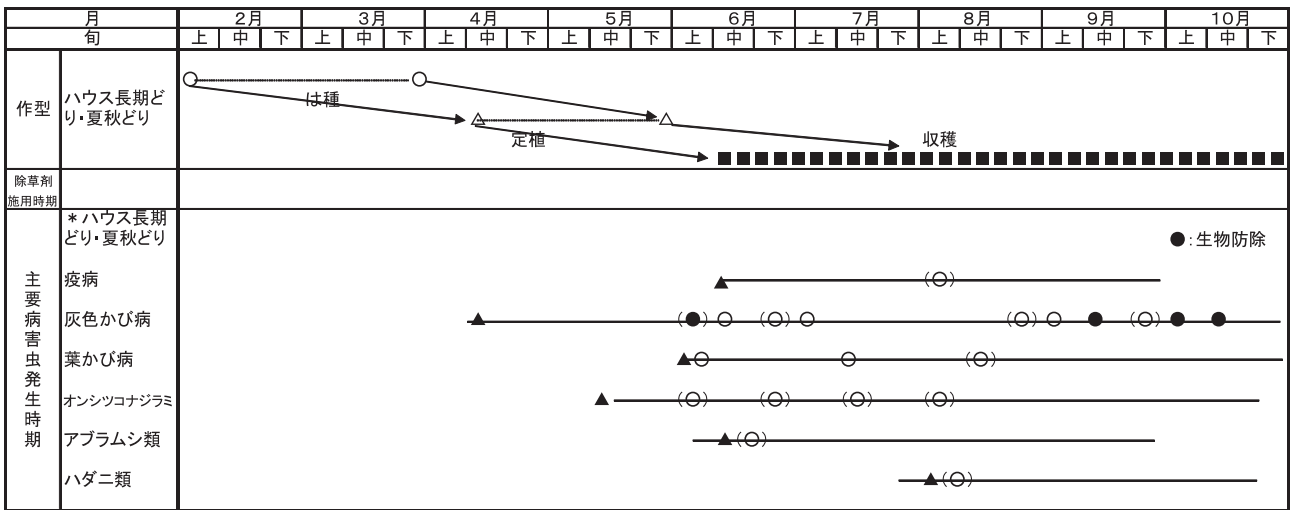


12 ミニトマト

A 栽培管理カレンダー



【凡例】 作型図 ○は種、△定植(移植)、■■■■■収穫、▲その他栽培管理法等
 主要病害虫発生時期図：——発生時期、○基幹防除時期、(○)臨機防除時期、▲発生状況調査等 (○内数字は成分数)
 ◎同時防除(同一薬剤で複数の病害虫を対象) (◆)条件付き防除

注)各作型の月旬は道央地帯を主としているので、道南、道東北地帯は前後する。

B 主なクリーン農業技術の概要

(1) 土づくり

- 基盤整備
 - ・排水対策の実施
- 有機物の施用
 - ・たい肥(4 t/10a) 施用を基本とした土づくり
- その他
 - ・亜酸化窒素ガス放出削減対策として、高温期の白マルチ使用、完熟たい肥を窒素施肥1週間以上前に施用、冬期間の被覆ビニール除去

(2) 施肥管理

- 土壌診断による施肥の適正化
 - ・土壌診断を行い、その結果を活用した「施肥対応」等による適正施肥
 - ・下層土(深さ20~60cm)の残存窒素量の評価による追肥量の削減
- 有機物の肥料評価による施肥の適正化
 - ・有機物由来窒素の評価による施肥窒素削減

(3) 雑草の防除

- 有色マルチの使用、隙間のないマルチの展張(除草剤は使用しない。)
- (雑草がマルチ穴等より発生した場合)速やかな手取り除草

(4) 病害虫の防除

- 化学的防除の効率化
 - ・灰色かび病の耐性菌出現防止対策として、系統の異なる薬剤のローテーション散布
 - ・オンシツコナジラミ対策としてピリプロキシフェン剤(テープ)の使用(殺虫剤散布回数を減少)
- 物理的防除
 - ・糖蜜を用いた土壌還元消毒法の利用(萎凋病、青枯病)と太陽熱消毒法の利用(半身萎凋病)
 - ・サツマイモネコブセンチュウ対策として、高温処理(太陽熱(45℃・3時間以上)、温水の灌水処理(3~5日間))

- ・かいよう病対策として、土壌消毒（太陽熱、簡易太陽熱、熱水）、温湯種籾消毒機による種子消毒の利用
- 生物的防除
 - ・灰色かび病、葉かび病対策として、バチルスズブチリス剤の利用
 - ・オンシツコナジラミ対策として、オンシツツヤコバチやボーベリア・バシアーナ剤、パーティシリ・ウムレカニ剤の利用
 - ・アブラムシ類対策として、コレマンアブラバチの利用
 - ・アザミウマ類対策として、ククメリスカブリダニの利用
- 耕種的防除
 - ・萎凋病、半身萎凋病、根腐萎凋病、葉かび病、青枯病及びタバコモザイクウイルスなどに対応した抵抗性品種・台木の導入
 - ・灰色かび病対策として、換気によるハウス内湿度の低下、圃場衛生管理（被害葉、被害果の除去）、防霧性フィルム資材の利用
 - ・オンシツコナジラミ対策として、作物残さ処理の徹底（抜き取り後ハウス内を45℃以上で7～10日間保つ）、ハウス内除草の徹底、未寄生苗の使用
 - ・ミカンキイロアザミウマ対策として、寄生した苗・植物を持ち込まない、冬期間の被覆ビニール除去による越冬阻止
 - ・サツマイモネコブセンチュウ対策として、耐虫性品種、対抗植物の利用

（5）植物成長調整剤の使用

○着果促進剤の使用は、低温期のみ限定し、マルハナバチ利用等の自然着果をできるだけ行うこと。なお、一花に対して着果促進剤の重複使用は行わないこと。

C 栽培に当たっての留意事項

- 半身萎凋病ではレース2が発生しており、これは半身萎凋病抵抗性品種及び台木を侵すので注意すること。
- 疫病が発生したばれいしょ圃場に隣接したハウスでは疫病の発生に注意すること。
- 「千果」は斑点病抵抗性を持たないので注意すること。

D 栽培に当たっての禁止事項

なし

E 肥料及び化学肥料の使用基準

| 分類 | 使用基準 | | | | | | | | | | |
|-----|---------------------------|------------------------|-------|------------------------|-------------------------|----------------------|----------------|----------------------|----------------|----------------------|-----------------------|
| | 慣行 化学肥料施用量 (kg/10a) | 総窒素施用量 (上限値、kg/10a) | | たい肥等施用量 (下限値、t/10a) | 化学肥料施用量 (上限値、kg/10a) | | | | | | たい肥施用量 (上限値、t/10a) |
| | | 基肥 | 追肥/1回 | | 追肥回数 | 窒素量 | 追肥回数 | 窒素量 | 追肥回数 | 窒素量 | |
| ハウス | 28.0 | 20.0 | 2.0 | 4.0 | 1回 2回 3回 | 11.0 13.0 15.0 | 4回 5回 6回 | 17.0 19.0 21.0 | 7回 8回 9回 | 23.0 25.0 27.0 | — |

- 注1 窒素肥沃度水準「低」の場合の基準である。
ただし、化学肥料施用量は窒素肥沃度水準「中」の基準を上限とする。
- 注2 総窒素量上限値＝基肥＋1回あたり追肥量×回数
- 注3 追肥回数＝収穫期間・回/15日
- 注4 たい肥1t当たり1.5kgの窒素換算量とする。ここでのたい肥とは、「牛ふん麦稈たい肥」「牛ふん敷料たい肥」を指す。
ただし、ふん尿割合の高いたい肥を利用する場合は1tあたり2kgの窒素換算量とする。
- 注5 たい肥等施用量下限値は、たい肥に相当する有機物での対応も認めるものとする。
- 注6 たい肥施用量は輪作内での平均値も認める。

F 化学合成農薬の使用基準

(単位：成分使用回数)

| 分類 | 慣行 | | | | | | | 使用基準 | | | | | | | | | | | |
|--------------|--------|--------|--------|--------|-----|-----|----|------|-----|-----|----|-----|----|-----|----|----|----|----|----|
| | 殺菌剤 | | 殺虫剤 | 殺虫・殺菌剤 | 除草剤 | 植調剤 | 計 | 殺菌剤 | | 殺虫剤 | | 除草剤 | | 植調剤 | | 計 | | | |
| | (種子消毒) | (種子消毒) | | | | | | 基幹 | 臨機 | 基幹 | 臨機 | 基幹 | 臨機 | 基幹 | 臨機 | 基幹 | 臨機 | 基幹 | 臨機 |
| | | | (種子消毒) | (種子消毒) | | | | | | | | | | | | | | | |
| ハウス長期どり・夏秋どり | 14 | (1) | 7 | 0 | 1 | 1 | 23 | 5 | (0) | 5 | 0 | 6 | 0 | 0 | 0 | 1 | 5 | 12 | 17 |

注1 使用基準は剤別（殺菌剤・殺虫剤・除草剤・植物成長調整剤）及び基幹・臨機防除別に記載
 基幹防除：平均的な病害虫の発生状態を考慮した場合、ほぼ毎年行う必要がある防除
 臨機防除：突発的な病害虫の発生や、地域や品種により発生状態が異なる病害虫に対して行う防除

注2 種子消毒は殺菌剤の内数とする。

注3 生産集団の栽培基準における化学合成農薬の使用回数は、使用基準の合計回数を下回るものとする。

注4 使用基準における化学合成農薬の剤別の使用回数は、地域の栽培実態に合わせ変動して差し支えない。

【参考：作型（地域別）】

| 作型 | 道央地域 | | | | | | 道南地域 | | | | | | 道東・道北地域 | | | | | |
|--------------|------|------|------|------|------|-------|------|------|------|------|------|-------|---------|------|------|------|------|-------|
| | は種期 | | 定植期 | | 収穫期 | | は種期 | | 定植期 | | 収穫期 | | は種期 | | 定植期 | | 収穫期 | |
| | 始 | 終 | 始 | 終 | 始 | 終 | 始 | 終 | 始 | 終 | 始 | 終 | 始 | 終 | 始 | 終 | 始 | 終 |
| ハウス長期どり・夏秋どり | 2/10 | 3/31 | 4/15 | 5/31 | 6/10 | 10/31 | 2/10 | 3/31 | 4/15 | 5/31 | 6/10 | 10/31 | 2/15 | 4/10 | 4/20 | 6/10 | 6/15 | 10/20 |

注1 道央地域：石狩、後志、空知、胆振、日高管内とする。

道南地域：渡島、檜山管内とする。

道東・道北地域：上川、留萌、十勝、網走、釧路、根室管内とする。

注2 作型は地域別の平均的な昨期を示したものであり、地域の栽培実態により当該期間が前後する場合があります。

G 注釈

●土壌診断による施肥の適正化

硝酸態窒素の分析を行い（定植前もしくは播種前）、窒素肥沃度に応じた施肥を行う。

●ミカンキイロアザミウマ対策

寄生苗等の持ち込みに注意し、早期発見と化学的防除により密度抑制し、冬期間のビニール除去による越冬阻止により総合的に防除を行う。冬期間の被覆ビニール除去が越冬を阻止する確実な方法であるが、側窓を開放し-10℃以下で168時間以上を確保できれば越冬を阻止できる。

●着果促進剤の使用

作期全体で数回の使用でも、花房毎に1回である場合、使用回数は「1」とする。